長崎大学の平和講座について

戸田清（平和学、教員）

長崎大学教養教育（全学教育）科目の「平和講座」は１９８３年４月に始まりました。当時は教員のなかに被爆者の方もおり、自身の被爆体験も含めて「戦争と平和」「原爆」について語られました。

長崎の平和学・平和教育は原爆を「原点」とするものであり、このことは「平和講座」においても変わりません（高橋眞司・舟越耿一編『ナガサキから平和学する！』法律文化社、２００９年、参照）。長崎大学は文教キャンパス（教育、薬学、水産、工学、環境）、坂本キャンパス（医学、歯学）、片渕キャンパス（経済）に分かれています。文教キャンパスは「三菱兵器大橋製作所」の跡地につくられました。キャンパスの下には、いまも被爆者たちの骨が埋まっています。その上で学生たちは学んでいるのです。坂本キャンパスの場所には、旧制長崎医科大学がありました。同じく骨が埋まっています。広島大学医学部の前身である旧制広島医科大学は呉市にありました。呉市は同じ県内ですが、被爆地からは離れています。そのため、長崎大学医学部は「被爆した唯一の医科大学」と呼ばれています。片渕キャンパスも、文教キャンパス・坂本キャンパスのような爆心地からの至近距離ではありませんが、被爆地域のなかにあります。なお、被爆地域の指定そのものがいまも「過小」であり、「被爆地」に隣接する地域（爆心地から１２キロ

メートル以内の被爆未指定地域）に住む人びとは被爆者であるにもかかわらず「被爆体験者」と呼ばれ、胃潰瘍だと治療費を助成されるのに、胃癌は自費診療を強要されるなどの理不尽な状況におかれています（その是正を求める「被爆体験者裁判」は、２００７年提訴、２０１２年不当判決、現在控訴審です）。２０１３（平成２５）年度の平和講座は、前期１コマ、後期１コマ（それぞれ９０分の講義を１５回）が開講されます。それぞれ２回ずつの講義で、「被爆体験・被爆後体験」が語られます（２０１１年度と２０１２年度の被爆者証言の動画がインターネットの「平和講座アーカイブ」に公開されています）。

原爆投下は、当時の国際法に照らしても米国政府の戦争犯罪（民間人攻撃、無差別爆撃）ですが、それを招いたのは日本政府の侵略戦争と戦争引き延ばしでした（「招爆責任」と言います）。侵略戦争（満州事変の開始から敗戦までにわたり「１５年戦争」「アジア太平洋戦争」などと呼ばれます）についての日本近代史の専門家による講義が、平和講座では数回ずつ行なわれます。

日本とドイツの敗北によって戦争が終わったわけではありません。２１世紀においても戦争は続いています。２００３年のイラク戦争は、米国などによる侵略戦争でした。米軍の兵員を輸送した航空自衛隊の活動は２００８年に名古屋高裁で憲法九条違反と指摘され、その判決が確定しました。広島・長崎以降、核兵器は使われていませんが、１９９１年の湾岸戦争以降、劣化ウラン弾という放射能兵器が使われています。平和講座でも、ベトナム枯葉作戦（農薬の軍事利用）や劣化ウラン弾など、現代（第二次大戦後）の戦争も取り上げています。日本の政治は、平和憲法と日米安保体制（日米同盟）の二重構造になっています。原発（核発電）は「過疎地」にしか立地できない制度になっていますが、原潜や原子力空母は佐世保や横須賀のような大都市にも入港できることになっています。平和講座でも基地問題と安保問題をとりあげています。

平和学は、戦争だけを対象とするものではありません。１９６０年代にヨハン・ガルトゥング（ノルウェー）によって、「戦争と平和の研究」から「暴力と平和の研究」への「パラダイム転換」が行われました。

戦争がなくても、差別、抑圧、人権侵害、貧困、飢餓、環境破壊などがあれば、平和とは言えないからです。戦争や殺人は「直接的暴力」ですが、女子割礼のようなある種の「伝統文化」や、水俣病のような環境破壊は、「構造的暴力」です。平和講座も、毎回ではありませんが、「構造的暴力」もとりあげるように努めています。また、原発は「原潜を陸にあげたもの」と言われますが、核の民事利用が「平和利用」と呼べないことは、福島第一原発事故によってますます明白になりました。平和講座でも原発問題をとりあげています。

人類の歴史は、類人猿との分岐から７００万年、現代人の誕生から２０万年と言われます。戦争の歴史は世界で約８０００年、日本で約２０００年にすぎません。平和講座は、戦争と暴力を克服していくための視点を若い世代に提示することを目指しています。

二〇一三年三月